

初対面二者の会話における質問—応答形式についての一考察

松崎 史周

1 はじめに

近頃、「話し方」について書かれた本をよく目にするようになった。『相手に「伝わる」話し方』(池上彰 2002/8 講談社)、『上手な話し方が面白いほど身につく本』(櫻井弘 1999/5 中教出版) など挙げていけばきりが無いほどである。だが、その多くは著者が自らの経験から会得した効果的なフレーズを紹介したり、会話の心構えを説いたりするもので、実際の会話を例にしてその言語特徴を分析し、そこから帰納的に話し方を説くものは見あたらない。

また、初対面の人との話し方についても、相手の興味ある話をしようといった話題の選び方について説いたものはあっても、初対面同士の会話に特有の話し方について説いたものはない。もちろん話題の選び方は大事であるが、せつかくの話題も相手に受け入れられる話し方があるからこそのものである。

初対面の人同士が話し合いをする場合、互いに相手のことをよく知らないので、質問—答えを基本として会話が進められると予想できる。しかし、実際の会話は単に質問—答えが繰り返されるだけではなく、時に質問された者が端的な答えを述べるに留まらず、それ以外の情報を提供することもある。また、相手が答えた後、さらに別の質問をする場合もあるが、相手の答えを受けて関連する情報を新たに提供する場合もある。

本稿では、実際に採取した会話資料を分析して、初対面二者の会話における質問—応答形式の特徴を述べていく。そして、会話の冒頭部では質問に対して端的な答えのみで終える応答形式が多いが、共通の話題が見つかると、端的な答えのみではなく、それ以外の情報を含めた応答形式が多くなることを示すと共に、感動詞「えっ」が質問を予告して会話を円滑に進行させる談話標識として機能していることを示していく。

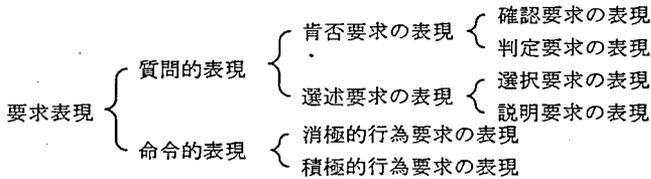
2 分析資料について

本稿で分析する資料は、調査のために採取した自然会話である。対象としたのは同じ大学に通う男女の学生で、共に初対面同士である。会話の採取はテープレコーダーを用いて行い、その際、二人には録音することを了承してもらっている。会話の時間は約 10 分間とし、その時間で会話が終了するようにお願いしたが、時間内に終了したものはなかった。

会話資料は平成 12 年 10 月に採取したものである。今回は同時期に採取した資料のうち、21 歳の女子学生と 20 歳の男子学生の会話を分析対象とした。もちろん多くの資料を対象とし、そこに現れる質問—応答形式の多様性を見ていかななくてはならないが、今回は研究の見通しを立てることを主な目的とし、多くの資料に当たることは今後の課題としたい。

3 質問—応答形式の分類

ここで、本稿における「質問」と「応答」の定義を述べていくが、まず「質問」については国立国語研究所（1960）の文表現の分類を参考にする。（以下「国研」と略す）国研は「質問」を「命令」や「依頼」を含めて「要求表現」の一つに位置づけている。



（国研（1960）p.109）

「質問」は応答のあり方によって「肯否要求」と「選述要求」に分けられている。「肯否要求」は yes-no で応答ができるものであるが、国研（1960）は、「確認要求」を「話し手が自己の判断について相手の確認を求める」¹⁾ 表現、「判定要求」を「話し手が、自己の判断の成立するか否かを、相手の判定にまつもので、yes、no、をもって答えることのできる」²⁾ 表現としている。なお、本稿では安達（1999）にならって「判定要求」を「真偽疑問」と呼ぶ。真偽疑問を表すものは「～カ、～ノ、～↑（上昇イントネーション）」などの文末形式を伴い、確認要求を表すものは「～（ヨ）ネ、～ジャナイ」などの文末を伴う。

- (1) あ一車持ってるんだ 自分の↑ 【真偽疑問】
- (2) わ和光の人だよね 【確認要求】

「選述要求」は yes-no で応答が不可能なものであるが、国研（1960）は、「選択要求」を「どちらかの判断を相手に選択することを要求する」³⁾ 表現、「説明要求」を「不定詞を含む質問の表現で、その内容を説明することを相手に求める」⁴⁾ 表現としている。なお、本稿では「選択要求」を「選択疑問」、「説明要求」を「疑問語疑問」と呼ぶこととする。選択疑問を表すものも疑問語疑問を表すものも共に「～カ、～ノ、～↑（上昇イントネーション）」などの文末形式を伴う。

- (3) 朝ですか、晩ですか 【選択疑問】（国研（1960）p.312）
- (4) 今 何年生↑ 【疑問語疑問】

本稿はこの国研の分類に従い、確認要求・真偽疑問・選択疑問・疑問語疑問に当たる表現を広く「質問」として扱うことにする。

次に「応答」についてだが、本稿が問題とする応答は典型的には質問に対する答えに当たるものである。真偽疑問に対する応答は、「はい」「いいえ」などの応答詞を用いたもの、応答詞に述語の繰り返しを加えたもの、「そうだ」「ちがう」などを加えたものがあ

4 各形式の特徴

では、実際の会話資料に現れたA・B各形式を見ていくこととする。まずは、会話の冒頭に現れたAの形式の例を挙げることにする。

(10)					
03f	えっわ ^{ひと} 和光の人だよ ^ね	今 ^{なん} 何年生	あっじゃーあたしと ^{おんな} 同じだー		
04m		<u>そうっす</u>	<u>3年です</u>		
05f	えっ ^{なに} 何 ^{なん} 学科 ^か	あっ R ^{なん} なんだー	何に見える	違う 違う	
06m	あっ	<u>Rです</u>		人間関係	

Aの形式は、質問に対して答えがなされ、それだけでひとまとまりの発話が完結するというものである。上記の(10)では、fの質問→mの端的な答えという形が繰り返されており、その間にfの情報提供がなされている。会話の冒頭部では、参加者は互いに相手のことを知ろうとして、相手に関する不明のことを尋ねたり確認したりする。そのため、ある程度共通認識が形成され、会話の話題となるものが見つかるまでは、質問と端的な答えが繰り返されることとなる。上記の(10)は、会話の冒頭部で、まだ共通認識を形成しつつある段階なので、新たな情報提供をすることが難しい。それは、mの答えに対してfが「じゃーあたしと同じだー」と発話しているが、それ以上続いていないことや、mが発話をしていないことから分かる。Aの形式は主に会話の冒頭部で立て続けに現れ、それもその間に情報提供が入り込みにくい傾向がある。

(11)					
35f	アハハハ	今一人暮らし	実家	あっそーなんだ	アハハ あたし
36m			<u>いやいや実家</u>		
37f	今一人暮らししてんだけど		それだけでも親のスネかじってんだけどね		
38m		うん		あー	

(11)は、fの質問（「今一人暮らし」）に対しmが端的な答え（「いやいや実家」）を述べるだけで応答が完結している。fはmの応答に対し、繰り返し（「実家」）やあいづち（「あっそーなんだ」）を行っているが、mが発話を続けられないため、発話権を取って自分の事情（現在一人暮らしをしていることなど）を述べている。

このように、Aの形式は会話の冒頭部に多く見られるが、これは会話を円滑に進めるために必要な共通認識を形成するべく、相手に関して不明・疑問なことを様々に聞いていくためだと考えられる。

次に、会話の中途部からBの形式の例を挙げることにする。

(12)					
49f	うん	あー車持ってんだ	<u>自分の</u>	親のー	
50m	ドライブ		<u>いや親の</u>	親2台持ってるからー	
51f		うん	あーなるほどー	えっどこらへんに行くの	
52m	1台。借りて二	よくー			

Bの形式は、質問に対して端的な答えを述べ、その答えに関連する付加情報を同一話者が続けて提供することで発話が完結するというものである。上記の(12)では、fの質問に対してmが「いや親の」と否定の応答をし、続けて「親2台持っているからー 1台借りてー よくー」とその理由を付加している。この段階で会話は「ドライブ(車)」が話題となっているが、mはこれを会話の話題とする意志があり、積極的に情報提供を行っている。そのため、発話の主導権はmが取り、fは聞き手の行動を取ることになる。聞き手の行動とは、あいづちを打ったり、相手に関して分からないことを質問・確認して、会話を継続させることである。上記の(12)では、「うん」とか「あーなるほど」があいづちに当たり、「えっどこらへんに行くの」が会話を継続させるための質問に当たる。

Bの形式には端的な答えを顕在させず、その内容を含めた付加情報がくるものもある。

(13)			
67f	： <u>そんなにつぶれたの</u>	うん	
68m	： <u>軽自動車だから</u>	軽い事故でもーベシヤツとなっちゃって	
69f	： <u>でー直してもどーせ元通りにはなんないしー</u>	うん	
70m	： <u>お金かかるからー</u>	だったらー保険	
71f	： <u>と合わせてー買っちゃったほーが</u>	そーだよー 早いよー ーこわーい	
72m	： <u>と合わせてー買っちゃったほーが</u>		

上記の(13)では、fの質問(「そんなにつぶれたの」)に対するmの端的な答えを省略している。「(車が)そんなにつぶれたの」という質問に対する答えとしては、「うん、(結構)つぶれた」などが考えられるが、ここでは答えの理由に当たる内容(事故にあった車が軽自動車なので、軽い事故でも車体がひどくつぶれたこと)が「ベシヤツとなっちゃって」という表現にパラフレーズされ、後続の付加情報に含まれている。mが応答をしている途中、fがあいづち(「うん」)を行っているが、それによってmの応答が終わり発話者が替わるということもないため、「買っちゃったほーが」までをmの応答と見ていだろう。このように、Bの形式には端的な答えを省略したものが多く、その場合、端的な答えの内容はパラフレーズされて付加情報に含まれるのである。また、mが発話の主導権をしっかりと握り、それを行使するようになると、fの行動はほとんどあいづちだけに限られてくる。

このように、Bの形式は会話の中途部に多く現れ、それも会話の話題が見つかった後に現れる傾向にある。そして、この形式が現れる部分では、発話権を持って会話を進めていく者と、聞き手の行動を行う者とが明確になってくるのである。

5 各形式の分布

4では、会話の冒頭部にはA形式が多く、会話の中途部、それも会話の話題が見つかった後にはBの形式が多いことを述べたが、実際にはこれらの形式はどのように分布しているのか。会話におけるA・B両形式の分布状況を見ることとしよう。

A・B両形式の分布状況は次の通りである。

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
形式	A	A	A	A	A	A	A	A	B	B	A	B	A
番号	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	
形式	A	A	B	A _B	A _B	B	B	B	B	B	B	B	

これを見ると、会話の冒頭部はほとんどAの形式で、後半部はほとんどBの形式であることが分かる。[17][18]の「A_B」とはBの要素が強いA形式のことであるが、[19]以降は全てB形式である。そこで、B形式が多くなる[16]前後からの会話を見ることとしよう。

14f 47f 48m	あついいですよ												
			いやいやいや										
49f 50m	うん												
	<u>ドライブ</u>												
51f 52m													
53f 54m													
55f 56m													
57f 58m													
59f 60m													

この部分は2人の会話が途切れ、言いよどみや間つなぎが続いた後のものである。[15]でfがmに趣味を尋ねた後から、会話の話題がmの趣味である「ドライブ（車）」になり、この後は[17][18]を除いて全てBの形式となっている。（[17][18]にしてもBの形式に近いものがある。）これは、mが車について多くの知識や経験を持っているため、fに多くの情報を提供できるようになったからだと考えられる。

この理由は次のように考えられる。まず一つは、fの方からmに話しかけ、この会話を始めたため、会話の前半はfがリードしていかなければならなかったということである。そしてもう一つは、後半は会話の話題がmの趣味である「ドライブ（車）」になり、mが自発的に会話をリードしていったということである。

以上のことから、初対面二者間の会話は、前半は互いのことを質問・確認しながら会話の話題を探る段階で、Aの形式が多く、全体的に発話量も少ない。そして、質問を投げかける方がそうでない方よりも発話量が多くなり、会話をリードしていく。一方、後半、それも話題が見つかった後はその話題について述べ合う段階で、Bの形式が多く、全体的に

発話量は多い。そして、質問を受ける方がそうでない方よりも発話量が多くなり、会話をリードしていく、というような特徴があると言えよう。

6 質問を予告する談話標識

会話参加者にとって、質問—応答はひとまとまりとして認識される。そのため、1つの質問—応答が完結すると、参加者は新たな質問—応答が続くと予想する。よって、次の質問へ移る際、それを予告する談話標識⁷⁾は特に必要ない。しかし、直前の発話と独立した新たな質問へ移る際には、それを予告する談話標識が必要となってくる。次の(15)では「えっ」がそれに当たる。

(15)									
01f	初めまして								
02m		ども初めまして		ハハハハハ	あー	ハハ	こんにちは	ハハハハハ	
							こんにちは		
03f	えっ	わ和光の人だよ <small>ひと</small>				今年 <small>今年</small> 年生		あっじゃー	あたしと 同じだ <small>おんなじ</small>
04m			<u>そうっす</u>			<u>3年です</u>			

(15)の「えっ」は会話の冒頭部での挨拶を行った後に現れている。「初めまして」や「こんにちは」といった挨拶は、一方の挨拶に対してもう一方が挨拶で応えることが社会的に要請・期待されるもので、挨拶—挨拶でひとまとまりの発話として認識される。そのため、一組の挨拶が完結すると、参加者は新たに発話を始めて会話を展開していかなくてはならない。だが、この際、発話権はフリーになっているため、自分が発話権を取って発話を始めることを示す必要がある。加えて、発話権を取って行う発話が質問であれば、会話をより円滑に進めるために、質問することを予告して、相手に心構えを作ってもらった方がよい。(15)の「えっ」は、発話権を取って⁸⁾、直後に「自分にとって不明なことを質問する」ことを予告する機能を持つと見ることができる。

田窪・金水(1997)は「えっ」の機能を「矛盾・関連性の低い情報の受け取りを表明する」⁹⁾こととしている。(15)の「えっ」は情報の受け取りを表明するものではないが、後に続く質問が先行の内容と関連性が低いという点は当てはまる。先行内容と関連性が低い質問を行うからこそ、それを相手に予告しているのだと考えることができる。

次の(16)の「えっ」も(15)と同じ機能である。

(16)									
45f	あーお茶がうまい	今日のなんか	ハハハハハ					えっ	じゃー
46m				いやいやいや					あっ
47f	あっいいですよ				趣味は	ハハハハ		趣味	趣味ねー
48m		いやいやいや							最近は一

(16)の「えっ」はfの質問を予告するものであるが、fが質問をする前に、mが「あっ」と言って発話権を取る意思を表明したので、それを受けてfは「いいですよ」と述べて相手に発話を継続するように促している(厳密に言えば、「あっ」と述べてfが発話権を取り直してから、mが発話の継続を促している)。だが、mが「いやいやいや」と述べて、発話を継続する意思がないことを表明したので、ここでfは予告した質問(「趣味は(何か)」)を実行した。このような事情から談話標識「えっ」と質問「趣味は」が離れ

てしまったのだが、mが発話を始めようと思ったにもかかわらず、それを実行しなかったのは、fが「えっ」を用いて質問を予告したことによるのだろう。

会話は場面に依存したものであり、参加者は互いの共通認識と思われることを基盤として話を進めていくこととなる。よって、もし少しでも不明な点があれば、それは解消していかなければならない。それは相手に質問し、相手がそれに応答することでなされる。そこで、自分が不明な点に気づいた場合、「えっ」を用いて質問することを予告すれば、相手は集中して質問を聞き、それに答えようという心構えができる。「えっ」という語は会話参加者間のやり取りを円滑にしつつも、自分が発話権を取って相手に質問を行うことを予告する機能を果たす談話標識であると言えよう。

7 おわりに

本稿では、実際の会話資料をもとに、初対面二者の会話における質問—応答形式の特徴を述べてきたが、今回は分析の対象とした資料が少なく、本稿で指摘した特徴も単に資料とした会話に見られた個別的な特徴に過ぎないのではないかと感じている。今後は資料の数を増やし、会話参加者の属性や意識の違いなどにも考慮して、初対面二者会話の一般的な特徴とはどのようなものか考察していきたい。

ところで、今回は録音終了後に会話の印象をf・mに尋ねてみたが、両者とも最初のうちは形式的でつまらないと感じたものの、会話の話題が「ドライブ」になってからは盛り上がりが出てきて楽しかったと述べている。また、fは他に採取した会話にも参加してもらっているが、自分の役割を意識して話したため、他の会話よりもうまくいったと述べている。fのいう「役割」とは自分が質問する側に立って相手の興味のあることを探り、見つかったらそれを会話の話題にしていくということだった。そうしたことを意識していく中で、fは質問を予告する「えっ」を使用したり、相手の応答に関連する質問をしたりするようになってきたのだと思われるが、このようなことは初対面二者の会話のストラテジーの一つと言えるのではないだろうか。この点についても今後検証を重ねていくこととしたい。

【注】

- 1) 国研 (1960) p. 305
- 2) 国研 (1960) p. 309
- 3) 国研 (1960) p. 312
- 4) 国研 (1960) p. 313
- 5) 益岡・田窪 (1992) pp. 135~139に基づいている。
- 6) 以下、会話資料の引用部に付された下線は、——が質問、＝が端的な答え、----が付加情報である。また、左側に記された記号は、fが女子学生の発話、mが男子学生の発話であることを示している。なお、女子学生・男子学生のことを指す場合にもf・mを用いていく。
- 7) 西野 (1993) は、会話の内容理解を助けたり、会話者間のやり取りをよりスムーズにしたり、会話者間の人間関係を円滑にしたりするものを「ディスコースマーカー」と呼んでいる。なお、「ディスコースマーカー」とは本稿のいう「談話標識」のことである。

- 8) 初鹿野 (1998) は、発話順番の交代に機能する談話標識として「だから」「あつ」「あの」「いや」「じゃあ」などを挙げている。
- 9) 田窪・金水 (1997) p. 266

【参考文献】

- 安達太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 大浜るい子 (1998) 「日本人の言語行動—談話展開のためのストラテジー」『広島大学日本語教育学科紀要』第8号、広島大学日本語教育学科
- 国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型 (1) —対話資料による分析』秀英出版
- 坂本あかり (1998) 「会話中に現れる応答表現についての一考察」『国語国文論集』第二十七号、学習院女子短期大学国語国文学会
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会編『文法と音声』くろしお出版
- 西野容子 (1993) 「会話分析について—ディスコースマーカーを中心として—」『日本語学』10月号、明治書院
- 初鹿野阿れ (1998) 「発話ターン交代のテクニック—相手の発話中に自発的にターンを始める場合—」『東京外国語大学留学生センター論集』第12号、東京外国語大学留学生センター
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 森山卓郎 (1989) 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1、大阪大学文学部日本学科 (言語系)

(まつざき ふみちか 長野清泉女学院高等学校国語科教諭)